

【第5回】

日本生理学会 100周年への想い —国際交流の立場から—

日本生理学会・副理事長（国際化・集会担当）
国際生理科学連合（IUPS）・2nd Vice President
アジア・オセアニア生理学会連合（FAOPS）・Secretary General
久保 義弘

日本生理学会（PSJ）の国際交流の100年の歴史を振り返るということは自分の力量では無理だと思ったのですが、上田陽一先生から、国際交流の立場から100周年への想いを綴ることで結構ですとご指示いただきましたので、この稿では雑駁な感想を記したいと思います。

100周年と聞くと、まさに気が遠くなる気がします。その歴史的な節目に、大会長の伊佐正先生、100周年記念事業委員会委員長の丸中良典先生、PSJ理事長の石川義弘先生を中心として、多数の素晴らしい企画を盛り込んだ第100回記念大会が開催されることを、PSJ会員のひとりとして大変誇らしく、また喜ばしく思います。掲げられた大会のテーマ“Homeostasis for Sustainability – Toward the Next Century of Physiological Sciences”は、生理科学の本質に迫るもので、かつ未来への志向が感じられ、魅力的だとつくづく思います。盛會を祈念しつつ、多大なご尽力をされている関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

さて、国際交流の立場からみてPSJの大きなイベントは、1965年に京都で開催された国際生理科学連合（IUPS）のコンGRESS（IUPS1965）、2009年に京都で開催されたIUPS2009、2019年に神戸で開催されたアジアオセアニア生理学会連合（FAOPS）のコンGRESS（FAOPS2019）ではないでしょうか？

IUPS1965は、故・加藤元一先生をPresidentとして、京都で開催されたと伺っていますが、参加者の総数等の詳細は残念ながら存じません。東京タワー、新幹線、東京オリンピックに象徴される日本の戦後復興のタイミングでIUPS1965が日本で開催されたことは、日本の生理科学の飛躍に

とって真に大きな節目だったのだらうと思います。その当時の通常の大会は日本語で実施されていたと推察し、英語化にどのような対応をされたのだらうかと興味津々なのですが、情報を得ることができませんでした。

IUPS2009は、宮下保司先生を大会Presidentとして、京都の地で開催されました。また、その当時（2005-2009）、金子章道先生がIUPS本体のPresidentを務めていらっしゃいました。参加登録者が4,000人を超える歴史的な盛會で、学術プログラムも、ソーシャルプログラムも素晴らしいものだったと思います。40代以上の皆様は、そのインパクトを鮮明に記憶されているんじゃないかと思います。

FAOPSは、故・伊藤正男先生がFounding Presidentとして多大なご貢献をされ、1990年に設立されました。その第9回大会であるFAOPS2019は、鍋倉淳一先生を大会Presidentとして、神戸において開催されました。参加者数が2,000人を超える、FAOPSとしては最大規模のコンGRESSとなりました。2年後にノーベル賞を受賞されたDavid Julius先生を含め、大隅良典先生、Linda Buck先生と、3人ものノーベル賞受賞者がPlenary Lectureを務められた点でも特別なものだったと思います。穏やかな求道者のオーラに包まれた小平奈緒選手が登壇されたことも印象的でした。

IUPS2009に備えて、その数年前から国際化の機運を高めようとPSJ大会の国際化が、すなわち、大会における学術プログラムの英語化や、安定的な国際交流シンポジウムの企画等が進められました。基本ポリシーは、後に国際交流委員会で

確認された「研究成果を英文誌に発表する（ことを目指す）研究分野」においては、講演を英語で実施しようというものでした。異論もあると思いますが、私自身は、グローバルな時代において自然な流れだと思っています。海外からの参加者や、近年多くいらっしゃる外国人留学生等にとって、日本語での講演は理解する余地が無いということもあります。

同時に、PSJ大会が、参加される方々がそれぞれに有益な情報を得て楽しめるものであるように、各大学等において通常日本語で行われる生理学の模擬講義等の教育関係のプログラムや、「研究成果を英文誌に発表することを必ずしも目指していない研究分野」に関して、日本語での講演が行われることは、それもまた自然なことだと思います。PSJは、会員皆のためにあるものであり、高い学術レベルを目指すとともに幅広い分野を包含することが重要だと思います。

ところで、つい最近、The Journal of Physiology (London) の編集長の Peter Kohl 先生から「第100回記念大会の折に、日本（人）が主たる貢献をして Journal of Physiology 誌に発表した論文の中から、特に優れた論文を選定して Online の Virtual Issue を出版したい。」というありがたいご提案をいただきました。近年の論文だけではなく、古典ともいえる過去の論文も対象とするものです。伊佐先生、石川先生および副理事長の方々、丸中先生他とご相談の結果、前向きに進むことになり、掲載する論文の選考作業を開始したところです。私は、Kohl 先生に J Physiol 誌のアジア地

区での振興を進めるための Regional Editor に任命されましたので、関係する皆様と協力して Editor の立場からも Virtual Issue の作成に尽力したいと考えています。

さらに、伊佐先生他の大会関係者のご配慮により、J Physiol 誌の Virtual Issue に掲載する論文の中から数件をピックアップして、その成果を紹介する学術シンポジウムを、第100回記念大会の中で開催させていただけることになりました。まだ、講演者等については白紙の状態ですが、ぜひ皆様にご参集いただければと願っています。

J Physiol 誌以外にも優れた生理学の学術雑誌は多数ありますが、1878年に創刊され、最も長い歴史を有する J Physiol 誌からこのようなご提案をいただいたことは、PSJ の100周年を J Physiol 誌の中にも刻むことにもなるので、素晴らしいことだと思っています。

オンライン会議が普及し、旅費と移動の時間を費やすことなしに海外の優れた研究者の講演を聞くことができるようになったため、今後、with コロナの時代においては、国際化の在り方もますます変わっていきだろろうと思います。同時に、過去に私自身が感じた、論文で知った憧れの研究者と対面でお話しさせていただいた時の興奮は未だに忘れがたいものがあり、大会等での、海外・国内の研究者と人的につながるができる対面のコミュニケーションの重要性は、時代が変わっても有り続けるだろろうと思います。

(2022年12月1日 記)